

## 令和7年度 卒業生アンケート

### 1 目的

卒業生の動向と看護実践能力の習得状況を明らかにすると共に、卒業後の実践場面における戸惑い・困難性を確認し、本校の教育の有用性や課題を明確化する。また、学校関係者評価として、教員・第三者による学校運営評価の分析結果に対する意見を得て、学校運営に反映する。

### 2 調査対象者

令和5年度卒業生34名（卒業後1年5か月目）うち回答者16名（回収率47.1%）

### 3 調査期間 2025年8月4日～8月29日

### 4 調査方法 調査依頼文とともに調査紙を送付し、同封の返信用封筒に入れて返信、若しくは Google フォームを用いたアンケート機能にての回答を依頼した。

### 5 調査内容と実施結果

#### 調査項目1：卒業後に転職・離職を考えた経験の有無、転職・離職を考えた理由

実施結果：転職・離職を考えたことがある者は10名（62.5%）、考えたことがない者は6名（37.5%）であった。考えたことがある理由（複数回答可）は、「現実とのギャップ」が5名と一番多く、次いで「医療事故を起こしそうで怖い」、「仕事がきつい」が各4名、「ストレス耐性がない」、「自分の知識・技術に自信がない」、「やりがいを感じない」、「病気」が各1名であった。

#### 調査項目2：看護実践能力の自己評価

日本看護協会の「看護実践能力習得段階（ラダー）」を基に作成した表を用い、現在の看護実践能力について該当するものを各項目から1つずつ選択し、回答を得た。本ラダーは、新人～IVまでの5段階が設けられており、新人は「必要に応じ助言を得て実践する」レベル、Iは「標準的な実践を自立して行う」レベルとされる。

実施結果：日本看護協会が規定する看護実践能力のうち、【専門的・倫理的・法的な実践能力】に該当する項目1～3は、大部分の者がIレベルまで「できる」と評価していた。【臨床実践能力】と【リーダーシップとマネジメント能力】に該当する項目4～10は、新人レベルとIレベルに評価が分かれた。そのうち、新人レベルであると評価した者とIレベルであると評価した者を比較し、新人レベルの方が多かった（9名以上）のは、項目4（ニーズをとらえる力）、項目5（ケアする力）、項目7（協働する力）、項目8（業務の委譲／移譲と管理監督）であった。【専門性の開発能力】に該当する11～14は、大部分の者がIレベルまで「できる」と評価していた。一方、「できない」と評価した者があったのは、項目2（倫理的実践）、項目3（法的実践）1名、項目11（看護の専門性の強化と社会貢献）、項目13（生涯教育）各1名、項目12（看護実践の質の改善）2名、項目14（自身のウェルビーイングの向上）3名であった。

|                  |    | 新人<br>(必要に応じ助言を得て実践する)                                   | I<br>(標準的な実践を自立して行う) | できない   |   |   |
|------------------|----|--|----------------------|--|---|---|
| 合理的・法的倫理的実践能力    | 1  | 自身の役割や能力の範囲を認識し、自立して行動・説明し実践への責任を持つ                      |                      | 16   | 0 |   |
|                  | 2  | 倫理指針等と目の前の実践を紐づけて理解し、倫理的指針に基づき行動する                       |                      | 15   | 1 |   |
|                  | 3  | 法令に基づき取るべき行動・取ってはいけない行動を知り、法令を遵守し行動する                    |                      | 15   | 1 |   |
| 臨床実践能力           | 4  | 助言を得てケアの受け手や状況(場)のニーズをとらえる                               | 10                   | ケアの受け手や状況(場)のニーズを自らとらえる  | 6 | 0 |
|                  | 5  | 助言を得ながら、安全な看護を実践する                                       | 10                   | ケアの受け手や状況(場)に応じた看護を実践する  | 6 | 0 |
|                  | 6  | ケアの受け手や周囲の人々の意向を知る                                       | 8                    | ケアの受け手や周囲の人々の意向を看護に活かすことができる   | 8 | 0 |
|                  | 7  | 関係者と情報共有ができる   | 9                    | 看護の展開に必要な関係者を特定し、情報交換ができる  | 7 | 0 |
| リーダーシップとマネジメント能力 | 8  | 看護チーム内の他職種の法的権限や役割を知り、助言を得て、業務を委譲し、委譲した業務の実施確認をする        | 12                   | 看護チーム内の他職種の法的な権限や役割を理解し、自立して業務を委譲し、委譲した業務の実施確認をする                        | 4 | 0 |
|                  | 9  | 助言を得て、安全な環境整備に関わるルールに基づき行動する                             | 8                    | 安全な環境整備に関わるルールに基づき自立して行動する   | 8 | 0 |
|                  | 10 | 自身の業務を時間内・時間通りに行うとともに、組織(チーム等)の一員としての役割を理解する             | 7                    | 組織や業務実施の標準的な計画に基づき、業務の優先順位の判断や効率的な時間管理を自立して行うとともに、組織(チーム等)の活動に参加し同僚と協力する | 9 | 0 |
| 専門性の開発能力         | 11 | 看護の専門職としての自覚と社会から求められている役割の認識に基づき行動する                    |                      | 15   | 1 |   |
|                  | 12 | 科学的根拠に基づき行動し、自身の看護実践を定期的に見直し質向上を図る                       |                      | 14   | 2 |   |
|                  | 13 | 自身の実践や能力の内省・評価や課題の整理を行い、適宜同僚等からのフィードバックも得ながら、学習を自ら計画的に行う |                      | 15   | 1 |   |
|                  | 14 | 自身のウェルビーイングの維持を図る  |                      | 13   | 3 |   |

### 調査項目3：本校の学校運営評価結果に対する意見

「教員による学校運営評価の分析結果(令和3年度・6年度)」と「第三者による学校運営評価の分析結果(令和6年度)」を調査紙と共に同封し、その内容に関する意見を自由記載で得た。

#### 実施結果：①教員による学校運営評価の分析結果

分析結果について「妥当である」との意見が多かった。長期的ルーブリックを用いた教育に対して「何を出来るようになるべきなのか、学生としても分かりやすかった」等の肯定的意見が2件あった。また、今後の課題として挙げた【施設設備の整備】と【国際看護が学習できる環境の整備】について賛同する意見がそれぞれ1件あった。

#### ②第三者による学校運営評価の分析結果

分析結果について「妥当である」との意見が多かった。今後の課題として挙げた【受験者数増員への取り組み(広報活動)】において、「他大学と比べて学外での学校説明会が少ないため、広報機会を増やすと良い」との意見が1件あった。

#### 調査項目 4. 本校の教育の中で、卒後の臨床場面において役に立っていること

実施結果：自由記載にて 16 件の回答があった。回答者が多い順に「OSCE（客観的臨床能力試験）」、「多重課題に関する授業・実習」、「シミュレーションでの看護実践、技術演習」、「フィジカルアセスメント」、「医療専門職（専門看護師、医師、薬剤師）による授業」であった。

#### 調査項目 5. 卒後の実践場面において、戸惑ったこと・困ったこと

##### その体験から本校の教育に希望すること

実施結果：自由記載にて 16 件の回答があった。「点滴の繋ぎ方」、「ルート確保の手技・流れ」、「吸引」、「人工呼吸器」、「輸液ポンプ、シリンジポンプ」等の医療処置に関するものや、「優先順位」、「急変時対応」、「入院・退院時対応」、「看護倫理」等であった。

## 6 考察

### ①卒業後に転職・離職を考えた経験の有無、転職・離職を考えた理由

転職・離職を考えたことがある者は 10 名（62.5%）であり、その理由から、学生時代のイメージと実際の臨床現場とのギャップに直面した者、看護実践に対する不安や業務の多忙さにストレスを抱えていた者が多かったことが明らかになった。また、本調査の回答者においては、実際に転職・離職に至る者はなかったものの、回収率が 47.1%であり、回答者以外の卒業生の中には、リアリティショックを感じたり、転職・離職に至った者がいるかもしれない。

この結果をふまえ、リアリティショックを緩和するための教育体制や取り組みとして、基礎教育におけるシミュレーション教育の実践や臨地実習での経験の充実は大きな意義があるため、更に深化させていきたい。また、就職先の選択にあたっては、学生個々の「目指す看護師像」を主軸にしながら、能力や性質を考慮した支援をしていく必要がある。

### ②看護実践能力の自己評価

今回の調査対象者は、卒業後 1 年 5 か月目にあたり、看護師として勤務 2 年目の者（14 名）と、助産師として勤務 1 年目の者（2 名）がおり、助産師 2 名は新人レベルであると評価した項目が多かったと推察する。しかし、卒業後 1 年 5 か月目の時点において、I の「標準的な実践を自立して行う」レベルまでできると評価した者がいることは、看護基礎教育における能力育成がベースにあるからこそその成長であると推察する。対象のニーズを捉え、対象に意向に沿ったケア実践ができること、必要な情報を共有すべき職種を特定し、情報交換ができることは、本校の教育において大事にしてきた部分であり、その教育効果が反映された結果であるといえる。

一方、【臨床実践能力】と【リーダーシップとマネジメント能力】において、自立して行うレベルには達していないと評価する者が多く、成長途上であることがうかがえた。今後、経験を重ねていくことで、能力の育成が図られていくものと推察する。よって、これまで以上に、「対象に関心を持つ力」と「思いやる力」を土台とした看護基礎教育と、多様な場において経験知を重ねる中で行う卒後教育の充実が必要であり、教育機関と臨床とのシームレスな育成システムの構築が重要となる。

また、ウェルビーイングの維持が「できない」と回答した者が 3 名いたことに関して、本校の教育におけるウェルビーイングに関する学習機会の少なさが要因の一つにあるのではないかと考える。看護職自身のウェルビーイングに関する講義は、外部講師による 2 年次の「総合看護 I」と「精神看護学Ⅲ」の計 2 回となっている。日本看護協会の『看護職の倫理綱領』において「看護職は、より質の高い看護を行うため、看護職自身のウェルビーイングの向上に努める」と定められている。質の高い看護の提供を目

指し、メンタルヘルスを維持するための具体的な方法を、学生のうちから学んでおくことは、卒後のストレス管理に有効であるといえる。本校教員による卒業前の研修としてウェルビーイングに関する内容を検討していく。

### ③卒業生による学校関係者評価

本校では毎年「第三者による学校運営評価」を、また3年毎に「教員による学校運営評価」を実施している。この2つの学校運営評価の分析結果について、卒業生（学校関係者）の立場からその妥当性について調査した。

「教員による学校運営評価」の分析結果に対しては、概ね「妥当である」との評価であった。また長期的ルーブリックを用いた教育に対する肯定的な意見が得られた。本校では、3年間の段階的な成長過程を可視化し、自己の課題と向き合いながら成長していくことを目的とした長期的ルーブリックを作成し、令和元年度から運用している。これは、ディプロマ・ポリシー6項目について学年ごとの到達目標を設定し、段階的に成長していけるよう細分化したものであるが、卒業生の意見から、在学中の具体的な行動指標となっていたことがうかがえる。よって、長期的ルーブリックに基づいた教育は有用であると評価したことの妥当性が証明されたこととなり、今後も本教育方法を継続していく。

また、「第三者による学校運営評価」の分析結果に対しても、概ね「妥当である」との評価であった。課題として「広報機会を増やすと良い」との意見があったが、この点は既に対策を講じており、例年の対面での学校見学会や業者主催の進学ガイダンスへの参加に加え、令和7年度はZoomによる個別の学校説明会を開催した。今後は、中学校・高等学校での出前授業への参加など、積極的な広報活動に努めていく。

### ④本校の教育の中で、卒後の臨床場面において役に立っていること

「OSCE」「シミュレーションでの看護実践、技術演習」「多重課題に関する授業・実習」「フィジカルアセスメント」等の実践的な教育に対し、好意的な意見が多かった。「OSCE」は2年次に実践している課外学習であるが、その効果を実感できるのが卒後の実践場面であることが実証された結果となった。この結果は、卒業生アンケートで常に得られるものであることから、今後もOSCEの有用性を在校生に伝えていくことを継続し、取り組み意欲の維持・向上を図っていく。加えて、卒業生や実習指導者のOSCEへの参加・協力の機会を設けることも検討し、在学中における看護実践能力の更なる育成を図っていかると良い。

また「専門看護師、医師による授業」に対する好意的な意見もあり、専門的な知識の習得や、実習における医療スタッフへの積極的な関わりに繋げるためにも、今後も、岐阜市民病院と連携した教育実践を行っていく。「シミュレーションでの看護実践、技術演習」に関しては、現在、全領域において実践されているが、引き続き、実習や卒後の実践場面に活かせる事例や場面での展開を継続すると共に、教員間の研究授業等の取り組み強化を図っていく。また、デブリーフィングを丁寧に行うことで、気付く力や臨床判断能力の育成を目指していく。また「多重課題に関する授業・実習」、「フィジカルアセスメント」に関する教育も継続していく。

### ⑤卒後の実践場面において、戸惑ったこと・困ったこと、その体験から本校の教育に希望すること

前回の調査同様、「点滴の繋ぎ方」、「ルート確保の手技・流れ」、「吸引」、「人工呼吸器」、「輸液ポンプ、シリンジポンプ」等の医療処置が挙げられた。これらは、厚生労働省の「看護師教育の技術項目と卒業時の到達度」において、到達レベルⅡ（指導の下で実施）～Ⅲ（見学）であるため、講義時の説明やデモンストレーション、実習時の見学に留まっている。しかし、卒後に実践が求められる技術であることからニーズが高いものとする。基礎教育においては、実習時の見学機会を積極的に作り、学生の主体的な学習

や教員による指導を通じて、各技術に関する理解を深め、卒後教育に繋げていけるとよい。また、「優先順位」、「急変時対応」については、3年次の講義・演習や実習において、必要な能力を培うことができるようなカリキュラムとなっている。シミュレーションやロールプレイ等の教育方法を継続しながら、臨地実習での経験を重ね、臨床実践能力の育成を図っていく。

## 7 今後の課題

- ①長期的ルーブリックに基づいた教育の継続
- ②「対象に関心を持つ力」と「思いやる力」を土台とした基礎教育の継続と、卒後教育とのシームレスな育成システムの構築
- ③OSCEの継続とその有用性の伝達による在校生の取り組み意欲の維持・向上、卒業生や実習指導者のOSCEへの参画検討
- ④実習や卒後の実践場面を想定した事例や場面を用いたOSCEやシミュレーション教育の継続、教員間の授業研究の強化
- ⑤看護職のウェルビーイングに関する学習機会の増加
- ⑥受験生確保及び学校活動周知のための広報活動の強化継続